

# 五十川遺跡 8

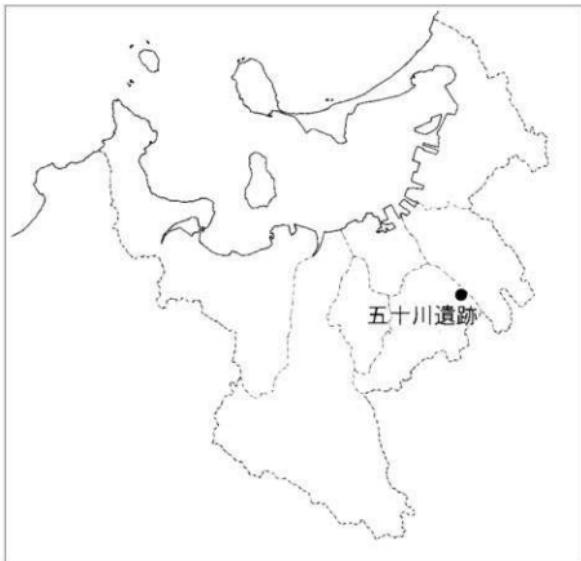
— 五十川遺跡第20次調査の報告 —

2018

福岡市教育委員会

ご  
じつ  
かわ  
**五十川遺跡 8**

—五十川遺跡第20次調査の報告—



遺 跡 略 号 GJK-20  
遺 跡 調 査 番 号 1609

2018  
福岡市教育委員会



## 序

福岡市は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。そのため、市内には数多くの歴史的な遺産が残されています。しかし、近年の著しい都市化により貴重な文化財が失われているのは事実であり、これらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う五十川遺跡第20次発掘調査について報告するものです。調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土するとともに、弥生時代や古墳時代の井戸や溝などの遺構を検出しました。これらは五十川遺跡における当時の集落域の広がりを知る上での手がかりとなり、地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社ショウジュン様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

## 例　　言

1. 本書は株式会社ショウジュンが実施する博多区諸岡3丁目647番1における共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成28年度に実施した五十川遺跡第20次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位はすべて磁北である。
3. 検出した遺構については、調査時の検出順に通し番号を付した。本書ではこの番号に遺構の性格を示す用語を付して記述する。遺構の呼称は溝をSD、井戸をSE、土坑をSK、ピットをSPと略号化している。
4. 本書で使用した遺構実測図は松崎友理が作成した。
5. 本書で使用した遺物実測図は松崎、平川敬治が作成した。
6. 製図は松崎による。
7. 本書使用の写真は松崎が撮影したものである。
8. 本書の執筆・編集は松崎が行った。
9. 本書に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理されるので活用されたい。

|           |                        |              |                   |              |                   |
|-----------|------------------------|--------------|-------------------|--------------|-------------------|
| 遺　　跡　名    | 五十川遺跡                  | 調　　査　次　数     | 第20次              | 遺　　跡　略　号     | GJK-20            |
| 調　　査　番　号  | 1609                   | 分　布　地　図　幅　名  | 板付 24             | 遺　　跡　登　録　番　号 | 0088              |
| 申　請　地　面　積 | 1672.58m <sup>2</sup>  | 調　　査　対　象　面　積 | 300m <sup>2</sup> | 調　　査　面　積     | 247m <sup>2</sup> |
| 調　　査　地    | 福岡市博多区諸岡3丁目647番1       |              |                   | 事　前　審　査　番　号  | 27-2-702          |
| 調　　査　期　間  | 平成28(2016)年6月27日～8月24日 |              |                   |              |                   |

# 本文目次

|             |    |
|-------------|----|
| I.はじめに      |    |
| 1. 調査に至る経緯  | 1  |
| 2. 調査組織     | 1  |
| 3. 立地と歴史的環境 | 2  |
| II.調査の記録    | 7  |
| 1. 調査の概要    | 7  |
| 2. 遺構と遺物    | 9  |
| (1) 溝       | 9  |
| (2) 井戸      | 12 |
| (3) 土坑      | 16 |
| (4) 出土石器    | 17 |
| III.おわりに    | 18 |

# 挿図目次

|  |    |
|--|----|
| Fig. 1 五十川遺跡周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)               | 3  |
| Fig. 2 五十川遺跡調査地点 (1 / 4,000)                   | 4  |
| Fig. 3 五十川遺跡周辺旧地形図 (1 / 4,000)                 | 5  |
| Fig. 4 第20次調査区位置図 (1 / 500)                    | 6  |
| Fig. 5 第20次調査区遺構配置図 (1 / 100)                  | 8  |
| Fig. 6 第20次調査区東壁土層断面図 (1 / 80)                 | 9  |
| Fig. 7 各溝土層断面図 (1 / 40)                        | 10 |
| Fig. 8 SD020出土遺物実測図 (1・2 = 1 / 2, 3・4 = 1 / 3) | 11 |
| Fig. 9 SD020杭列検出状況 (北から)                       | 11 |
| Fig.10 SD020下駄検出状況 (東から)                       | 11 |
| Fig.11 SE003実測図 (1 / 30)                       | 12 |
| Fig.12 SE003出土遺物実測図 (1 / 3, 14のみ 1 / 2)        | 13 |
| Fig.13 SE006実測図 (1 / 30)                       | 14 |
| Fig.14 SE006出土遺物実測図 (1 / 3)                    | 14 |
| Fig.15 SE032実測図 (1 / 30)                       | 15 |
| Fig.16 SE032出土遺物実測図 (1 / 3)                    | 15 |
| Fig.17 SK033実測図 (1 / 40)                       | 16 |
| Fig.18 SK033出土遺物実測図 (29・30= 1 / 4, 31= 1 / 3)  | 16 |
| Fig.19 出土石器実測図 (1 / 1, 38のみ 1 / 2)             | 17 |

## 図 版 目 次

- PL. 1    1    I 区全景写真（東から）  
          2    II 区全景写真（東から）
- PL. 2    1    SE003 土器出土状況（北西から）  
          2    SE003 完掘状況（北西から）  
          3    SE006 半裁状況（南西から）
- PL. 3    1    SE006 完掘状況（南から）  
          2    SE032 完掘状況（東から）  
          3    SK033 完掘状況（北西から）
- PL. 4    1    調査区西壁土層（東から）  
          2    出土遺物

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市博多区諸岡3丁目647番1における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成27年10月26日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である五十川遺跡に含まれていること、試掘調査が実施され現地表面下約100cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、工事によってやむを得ず破壊される300m<sup>2</sup>を対象地として、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は株式会社ショウジュンと福岡市との間で委託契約が締結され、平成28年6月27日に着手、平成28年8月24日に終了した。翌平成29年度に資料整理および報告書作成を行った。

### 2. 調査組織

調査委託 株式会社ショウジュン

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査: 平成28年度 整理報告: 平成29年度)

|      |             |            |             |
|------|-------------|------------|-------------|
| 調査総括 | 文化財部埋蔵文化財課  | 課長         | 常松幹雄        |
|      |             | 同課調査第1係長   | 吉武 学        |
| 庶務   | 埋蔵文化財課      | 管理係長       | 大塚紀宜(28年度)  |
|      |             |            | 松原加奈枝(28年度) |
|      | 文化財保護課      | 管理調整係      | 松原加奈枝(29年度) |
| 事前審査 | 埋蔵文化財課      | 事前審査係長     | 佐藤一郎(28年度)  |
|      |             |            | 本田浩二郎(29年度) |
|      |             | 主任文化財主事    | 池田祐司        |
|      |             | 文化財主事      | 大森真衣子(28年度) |
|      |             |            | 中尾祐太(29年度)  |
| 発掘調査 | 埋蔵文化財課調査第1係 | 文化財主事      | 松崎友理        |
| 発掘作業 | 宮崎正 廣瀬公則    | 吉田哲夫 柴田秀人  | 河原明子        |
|      | 木田憲作 久保和美   | 山本加奈子 渡辺清嗣 | 吉岡田鶴子       |
|      | 木田ひろ子 西田文子  | 山本千加子      |             |
| 整理作業 | 西村加奈        |            |             |

### 3. 立地と歴史的環境

福岡平野は三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に開口する博多湾に面している。この平野は那珂川と御笠川の沖積作用によって形成された沖積低地と、阿蘇山の火碎流によって形成された洪積台地からなる。五十川遺跡はこの福岡平野に形成された洪積台地上に立地する集落遺跡の一つであり、五十川遺跡の周辺には、奴国の王墓地と推定される須玖岡本遺跡や古代の官衙的施設および寺院跡の存在が推定される那珂遺跡群や井尻B遺跡などが立地している。

五十川遺跡の範囲は南北約800m、東西約240m、標高は9~11mを測る。台地の南側では狭い谷を隔てて井尻B遺跡と隣接し、北側は緩やかな鞍部を介して那珂遺跡群の立地する段丘面に連続している。それ以外は沖積地に囲まれており、独立した台地となっている。春日丘陵と呼ばれるこの洪積台地は花崗岩風化礫層を基盤としており、その上部に粗砂・細砂・腐植土層、最上部に阿蘇山の火碎流による八女粘土・鳥栖ロームが形成されている。

五十川遺跡ではこれまでに21次の調査が実施されている。「都市計画道路御供所井尻線道路整備事業」の計画によって、平成14~17年度に行われた発掘調査では台地南西部において比較的広い面積で調査が実施された。第1次調査とそれらの調査を除くと、民間宅地開発による1,000m<sup>2</sup>以下の小規模の面積を対象とした、散発的な調査となっている。そのため、五十川遺跡の詳細についてはまだ不明確な部分が多い。

台地南西部ではナイフ形石器や原の辻型台形石器などが出土しており、遺物では後期旧石器時代後葉まで遡ることができる。縄文時代においても打製石鏃などの石器類が認められるものの遺構は確認されていない。弥生時代前期後半になると集落が営まれるようになり、竪穴住居跡や貯蔵穴、土坑などの遺構や甕棺墓などがみつかっている。遺構は台地の南西部と中央東部で検出されているが、いずれも台地の低部に面する辺縁部にある。台地の南西部では弥生時代中期前葉まで集落と墓地が継続している様相がうかがえるが、東部では弥生時代中期後半の貯蔵穴と弥生時代後期の住居跡や建物跡を検出した以外は、弥生時代中期~後期の遺構はほとんど検出されていない。

古墳時代前期には台地の南西部と東部において竪穴住居跡や方形周溝墓群などが検出されており、古墳時代前期の集落と墓地が台地上に展開していた可能性が考えられる。しかし、古墳時代中期の遺構や遺物は見つかっておらず、周辺の比恵遺跡群や那珂遺跡群、井尻B遺跡と同様の様相となる。古墳時代後期においても検出された遺構は少なく、希薄である。

古代にはいると、7~8世紀に位置づけられる溝や井戸などがみつかり、台地上の各所で遺構が確認できる。第1次や第9次調査では那珂遺跡群などで出土する初期瓦が見つかっているが、掘立柱建物跡などは検出されていない。中世においては11世紀~13世紀代と推定される掘立柱建物跡や井戸などの遺構のほか、輸入陶磁器である青磁碗を副葬した木棺墓などが見つかっている。中世後半にあたる14~16世紀には、台地東部と南西部において方形に巡るとみられる大溝や掘立柱建物跡が検出されている。溝を中心とする遺構も多くみられるようになり、これらは室町時代から戦国時代の豪族居館や濠と考えられている。

このように五十川遺跡では弥生時代から中世まで各時代の遺構が認められるものの、遺構の広がりや密度は周辺の比恵遺跡群や那珂遺跡群、井尻遺跡とは様相が異なる。周辺の遺跡に比べ、調査次数が少ないと要因がある可能性も考えられるが、集落が継続して営まれず、各時期の遺構が散発的に点在している。少なくとも、これまでに行われた調査成果から、弥生時代前期後半および古墳時代前期、中世に集落としてのピークがあると考えられる。



1. 五十川道路
2. 櫻田道路
3. 席田青木道路
4. 久保園道路
5. 席田大谷道路
6. 吉塚道路
7. 博多道路群
8. 東比恵三丁目道路
9. 雀岡道路
10. 東那珂道路
11. 那珂君休道路
12. 板付道路
13. 高畠道路
14. 山王道路
15. 比恵道群
16. 那珂道路群
17. 諸岡B道路
18. 諸岡A道路
19. 井尻A道路
20. 三浜道路
21. 笹原道路
22. 井尻C道路
23. 井尻B道路
24. 横手道路
25. 三宅C道路
26. 大橋E道路
27. 三宅B道路
28. 野間B道路
29. 野間A道路
30. 中村町道路
31. 大橋A道路
32. 大橋D道路
33. 大橋C道路
34. 三宅A道路
35. 大橋B道路
36. 和田田藏池道路
37. 若久A道路
38. 若久B道路

Fig. 1 五十川遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

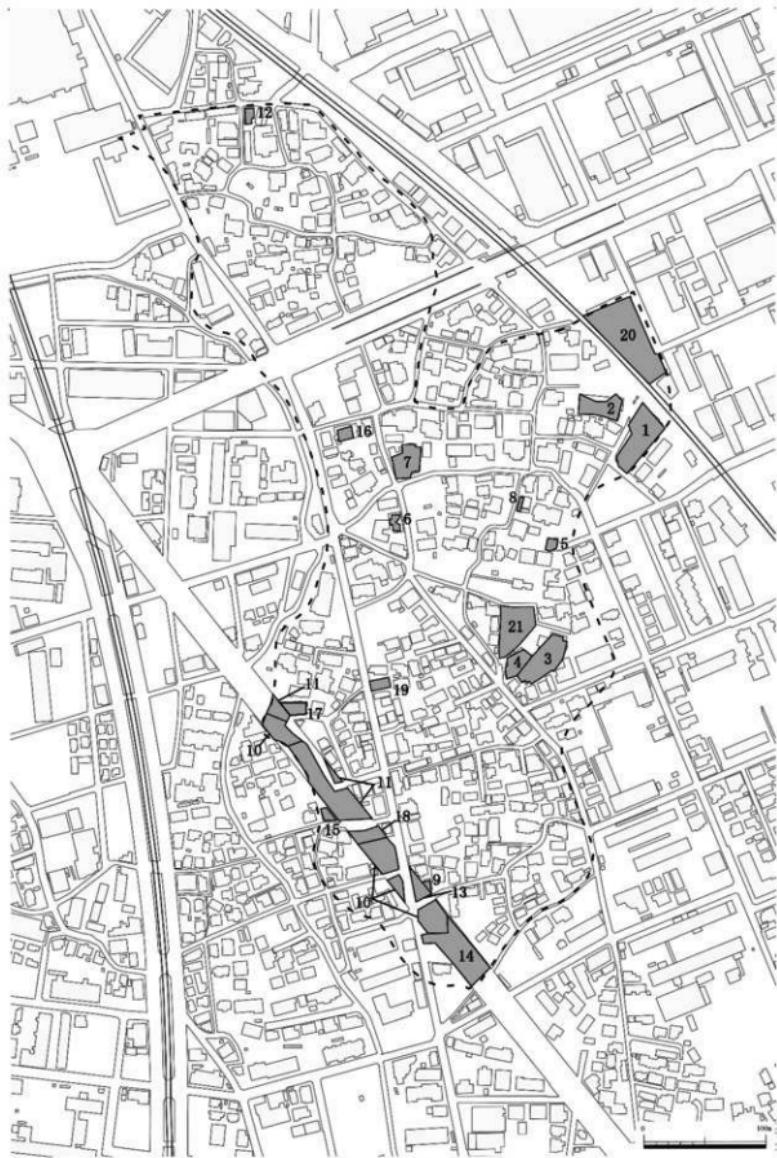


Fig.2 五十川遺跡調査地点 (1/4,000)

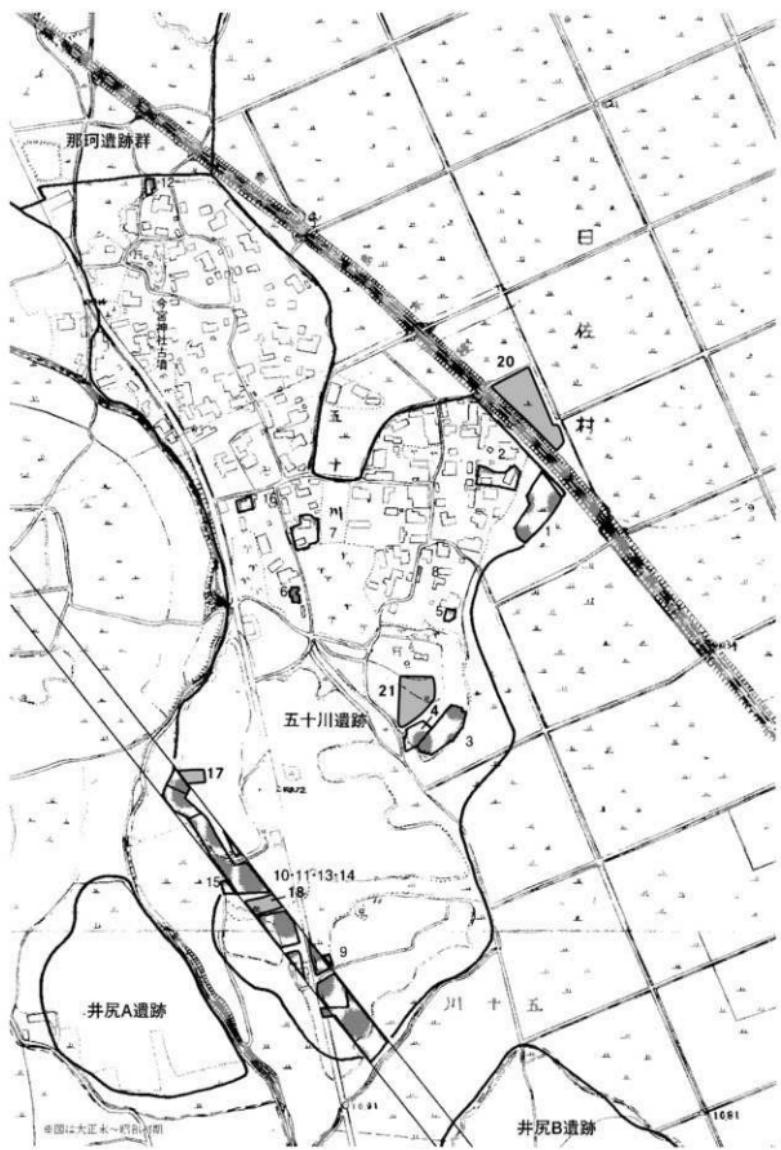


Fig. 3 五十川遺跡周辺旧地形図 (1/4,000)

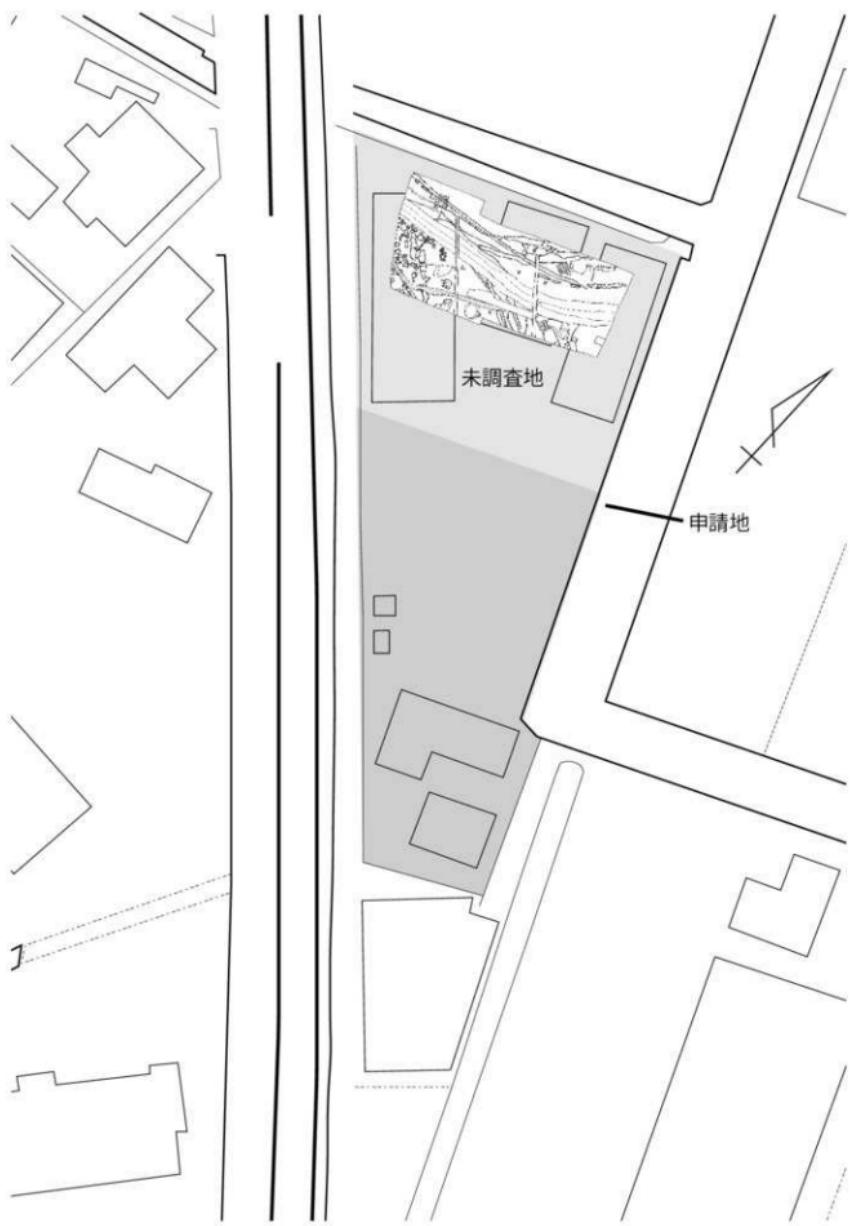


Fig. 4 第20次調査区位置図 (1/500)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

第20次調査区は博多区諸岡3丁目647番1に位置する。調査地の西側にはJR鹿児島線が通っており、これを挟んで南西側に五十川遺跡が広がる。これまでに周辺で行われた試掘調査の結果などから、JR鹿児島線を境に五十川遺跡の立地する丘陵が東側へ落ち、谷部になっていると想定されていたため、本調査地は五十川遺跡の範囲に含まれていなかった。しかし、周辺では五十川遺跡の第1次・第2次調査が行われており、五十川遺跡の北側隣接地ということで今回共同住宅建設設計画の策定にあたって申請がなされた際、試掘調査を行った。その結果、申請地の北側で遺構がみつかり、五十川遺跡の立地する丘陵が北東側へ延びることが確認された。申請地が五十川遺跡の北東端に位置することが想定されたため、遺構がみつかった申請地の北側を五十川遺跡の第20次調査として発掘調査を行うことになった。なお、申請地の南側では遺構・遺物ともに検出されておらず、丘陵の谷部にあたると推定される。

調査地の現況は倉庫解体後の平坦地であり、地表面の標高は約8.8mを測る。平成28年6月27日に発掘機材やリース機材の搬入、世界測地系によるトランバース杭の設定等を行い、発掘調査を開始した。排土を場内で処理する必要があったため、調査区を東西で分割した。まず、西側をI区として最初に調査を行い、I区の調査終了後に反転して東側のII区の調査を行うこととした。天候不良により調査開始から表土剥ぎまでに時間要することになったが、7月2・4・5日の3日間でI区の表土剥ぎを行った。調査区内は近現代に行われた水田開発によって大きく削平され、基盤層の鳥栖ロームが失われていた。そのため遺構は八女粘土の基盤層で検出された。I区の西壁で確認された堆積土層では上から表土・碎石・旧水田土・八女粘土（地山）となり、I区における遺構検出面の標高は約8.0mを測る。I区では井戸2基、溝9条、ピットなどの遺構を検出した。検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物の取り上げ、周辺測量などの作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した7月28日にI区の全景写真を撮影した。その後、8月1~4日の4日間でI区の埋め戻しおよびII区の表土剥ぎを行った。II区における遺構検出面の標高は約7.7~8.0mを測る。西側のI区に比べると検出面の標高が低く、II区の南東隅では丘陵の落ち際を確認した。II区ではI区から延びる溝6条の他、新たに井戸1基、溝3条、土坑1基、ピットなどの遺構を検出した。I区と同様の作業手順で調査を行い、8月18日にII区の全景写真を撮影した。その後、残った図化作業や個別遺構の写真撮影、出土土器の洗浄作業などを行、8月22・23日に重機によるII区の埋め戻しを行った。24日に機材や出土遺物などの搬出を行って調査を終了した。調査対象面積は申請面積1672.58m<sup>2</sup>のうち、300m<sup>2</sup>であるが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は247m<sup>2</sup>であった。

I・II区で合わせて溝12条と井戸3基、土坑などの遺構を検出した。東西方向に継続する大溝は近世のもので、上部には明治時代の遺物も含まれる。3基の井戸のうち、1基が弥生時代中期、2基が古墳時代初頭と考えられる。土坑は1基のみで出土遺物から古墳時代初頭と推定される。I区の南西側では明確な遺構ではない浅い窪みを多数検出している。また、II区の南東隅では八女粘土を確認できず、粗砂になっていることから、丘陵の落ち際と推定される。なおI・II区ではともに南北方向に延びる暗渠が見つかっており、旧水田の痕跡が認められた。遺物は弥生時代中期の土器や古墳時代初頭の土師器といった土器が中心であるが、打製石器や石庖丁などの石製品の他、下駄やキセルなど近世の遺物もあり、バンケース計7箱分が出土した。

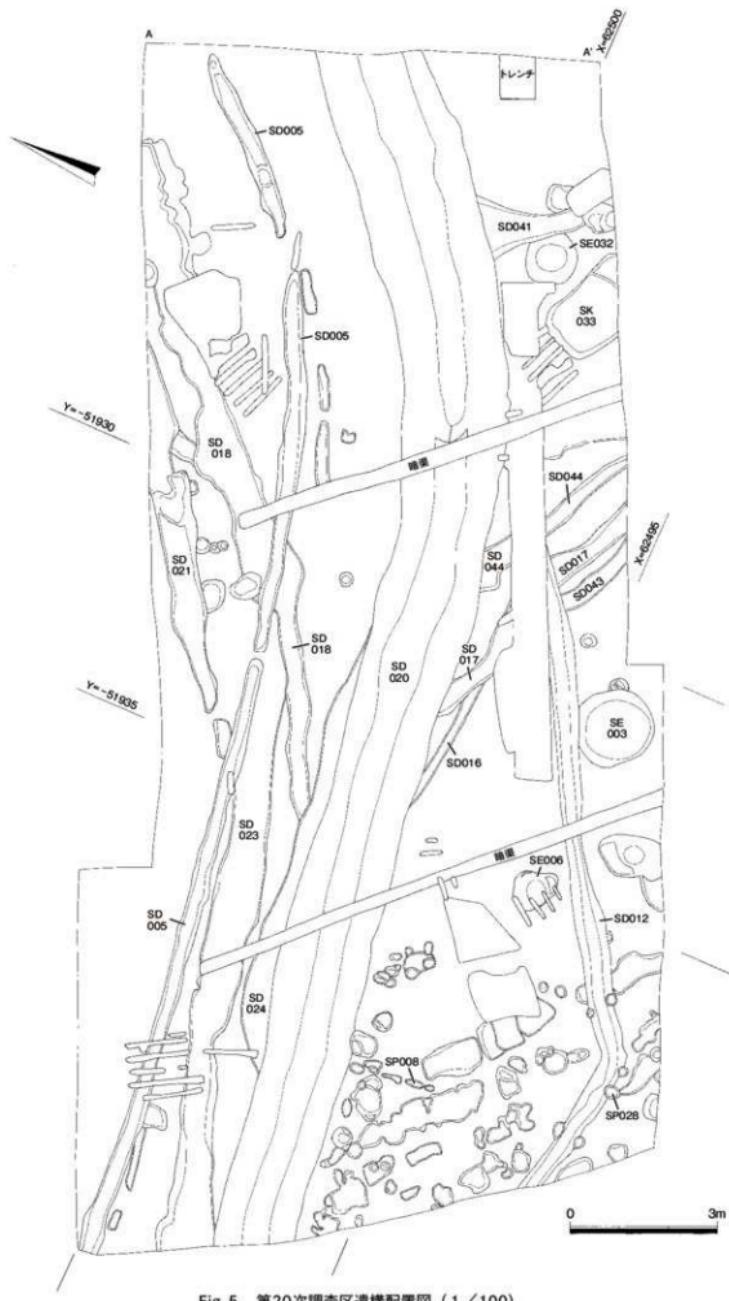


Fig. 5 第20次調査区造構配図 (1/100)

## 2. 遺構と遺物

### (1) 溝 (SD)

I・II区で合わせて12条の溝を検出した。

**SD 005** (Fig. 5・7) 調査区の北西隅から北東隅にわたってややカーブしながら縦断する。検出面の標高は約7.9mを測る。調査区内で約25mにわたって確認された。北西側は調査区外へと続き、北東側は不明である。東側は不連続であるが、旧水田によって溝の上部が削平され、底部のみが残存している状態と考えられる。溝の幅は約35cm、深さ約15cmを測る。埋土は暗茶褐色土である。

**出土遺物** (Fig.19 PL 4-2) 打製石鐵が1点出土した (Fig.19-33)。打製石器以外に、弥生土器・須恵器・陶器の破片が数点出土しているが、細片のため図化し得ない。時期については不明確であるが、近世の溝であるSD 020と並列しており、陶器片も出土していることから近世の溝と考えられる。

**SD 012** (Fig. 5・7) 調査区の南西側に位置し、検出面の標高は約8.0mを測る。溝の西側は調査区外へと続く。東側は擾乱により削平されているが、擾乱の下で溝の底面を検出でき、東端はSD 020に切られていた。長さ約15m、幅約60cm、深さ約15cmを測る。埋土の主体は黒褐色土である。

**出土遺物** 弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土した。いずれも細片のため、図化し得ない。出土遺物が少なく、溝の時期は不明確であるが、古墳時代中期～飛鳥時代と推定される。

**SD 016** (Fig. 5・7) 調査区中央よりやや南側に位置し、検出面の標高は約8.0mを測る。東側をSD 017、西側をSD 020に切られる。長さ約2.7m、幅約20cm、深さ約4cmを測る。埋土は黒褐色土である。

**出土遺物** (Fig.19 PL 4-2) 打製石鐵が1点出土した (Fig.19-32)。打製石器以外に、弥生土器・土師器の破片が数点出土した。細片のため、図化し得ない。出土遺物が少なく、溝の時期は不明確であるが、溝の切り合いから弥生時代後期～古墳時代初頭と推定される。

**SD 017** (Fig. 5・7) 調査区中央よりやや南側に位置し、検出面の標高は約8.0mを測る。南側は調査区外へと続き、北側ではSD 016を切る。溝の中央はSD 012、北側はSD 020に切られる。長さ約5.5m、幅約60cm、深さ約15cmを測る。埋土の主体は暗褐色土である。

**出土遺物** 土師器・瓦が出土した。瓦は近世以降のもので上層の混ざり込みと考えられる。土師器は細片のみで図化し得ない。出土遺物が少なく、溝の時期は不明確であるが、溝の切り合いから古墳時代の可能性が考えられる。

**SD 018** (Fig. 5) 調査区北側に位置し、検出面の標高は約7.9mを測る。北東側は調査区外へと続き、中央をSD 005、南西側をSD 020に切られる。幅は一定ではなく、34～110cmを測る。長さは14.5m、

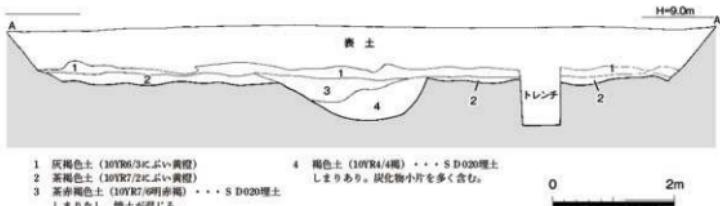


Fig. 6 第20次調査区東壁土層断面図 (1/80)

深さは約5cmである。埋土の主体は褐色の砂質土である。なお、SD021とは並び合った状態で検出されており、溝の形状や埋土が類似している。出土土器からは同時期の可能性も考えられる。

**出土遺物** 弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土した。いずれも細片のため、図化し得ない。出土遺物が少なく、溝の時期は不明確であるが、古代と推定される。

**S D 020** (Fig. 5・6、8~10 PL 4-1・2) 調査区の中央を東西方向にややカーブしながら縱断する大溝である。検出面の標高は約7.9mを測る。東西はいずれも調査区外へと続く。長さ24.5m、最大幅2.4mを測る。西側の底面は標高約7.3mであるが、東側では一段下がり、最底面の標高は約7.2mを測る。上層では焼土が混じった茶褐色土、下層では褐色土が堆積している。なお、溝の両壁面にはFig. 9に示すように杭列が検出されており、土留めの板材などを据えるために打ち込まれたものと考えられる。

**出土遺物** (Fig. 8・10・19 PL 4-2) 打製石器1点 (Fig.19-37) や瓦、陶磁器、陶器などバンケース6箱分が出土した。1は銅製のキセルで、竹とみられる羅宇が残存している。2は不明鉄製品で、一部木質が付着している。3は底面付近で出土した木製の下駄である (Fig.10)。4は壁面に打ち込まれていた杭で、自然木の端部が面取りされている。溝の時期については、上層に近世以降の瓦や型紙摺の陶磁器などが多く、下層でキセルや下駄などが出土したことから、近世に掘削され、近代に入って完全に埋没したと考えられる。

**S D 021** (Fig. 5) 調査区の北側に位置し、検出面の標高は約7.8mを測る。南西側が一部不連続であるが、旧水田によって溝の上部が削平され、底部のみが残存している状態と考えられる。北東側は調査区外へと続き、南西側はSD005に切られる。長さ約7.0m、幅約75cm、深さ約5cmを測る。埋土の主体は黄褐色の砂質土である。なお、溝の形状や埋土、出土土器などからSD018と同時期の溝の可能性が考えられる。

**出土遺物** (Fig.19) 磨石が1点出土した (Fig.19-38)。磨石以外は弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。出土遺物が少なく、溝の時期は不明確であるが、古代と推定される。

**S D 023** (Fig. 5) 調査区の北西側に位置し、検出面の標高は約7.8mを測る。西側は一部SD020に切られ、調査区外へと続く。東側はSD005とSD018に切られ、それ以東は検出できなかった。長さ約13m、幅約1.0m、深さ約5cmを測る。

**出土遺物** 弥生土器・土師器・須恵器・瓦などの破片が出土した。瓦はにぶい黄橙色を呈し、凹面には布目痕跡が認められる。出土した土器はいずれも小片のため、溝の時期は不明確であるが、奈良時代の可能性が考えられる。

**S D 024** (Fig. 5) 調査区の北側に位置し、検出面の標高は約7.8mを測る。南側をSD020に切られているため、北側のみの検出となった。長さ約9.0m、深さ約10cmを測る。

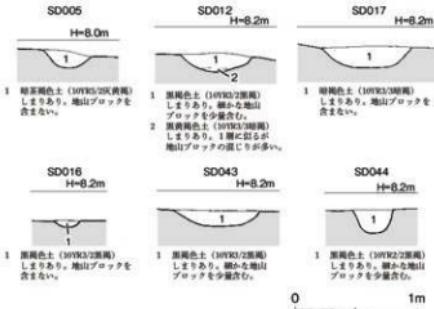


Fig.7 各溝土層断面図 (1/40)

**出土遺物** 土師器・須恵器・瓦の破片が出土した。いずれも小片のため溝の時期は不明確であるが、奈良時代と推定される。

**S D 041** (Fig. 5) 調査区の南東側に位置し、検出面の標高は約7.9 mを測る。北側をS D 020、南側を土坑に切られ、西側はS E 032を切る。長さ約2.0 m、最大幅約1.3 mを測る。

**出土遺物** 弥生土器・土師器の破片が出土している。いずれも小片のため時期は不明確であるが、出土土器と切り合い関係から古墳時代初頭～前半と考えられる。

**S D 043** (Fig. 5・7) 調査区の中央南側に位置し、検出面の標高は約8.0 mを測る。南側は調査区外へと続き、北側はS D 012に切られる。長さ約1.8 m、幅約40cm、深さ約5 cmを測る。埋土の主体は黒褐色土である。

**出土遺物** 弥生土器・土師器の破片が出土している。いずれも細片のため時期は不明である。

**S D 044** (Fig. 5) 調査区の中央南側に位置し、検出面の標高は約8.0 mを測る。南側は調査区外へと続き、中央は攪乱とS D 012、北側はS D 020に切られる。長さ約4.0 m、幅約80cm、深さ約15cmを測る。埋土の主体は黒褐色土である。

**出土遺物** 土師器・白磁皿・染付瓶などの破片が出土した。いずれも小片のため図示し得ない。時期は不明確であるが、近世の溝と考えられる。

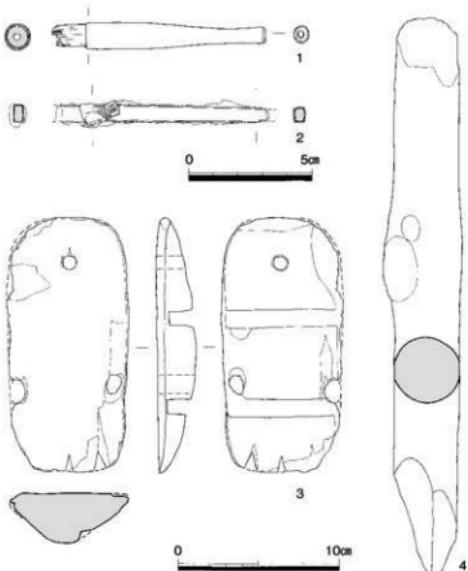


Fig. 8 SD020出土遺物実測図 (1・2 = 1/2, 3・4 = 1/3)



Fig. 9 SD020杭列検出状況 (北から)



Fig. 10 SD020下駄検出状況 (東から)

## (2) 井戸 (S E)

弥生時代中期の井戸1基、弥生時代終末～古墳時代初頭の井戸2基を検出した。いずれも調査区の南側に位置し、北側では井戸は検出されていない。

**S E 003 (Fig.11・12 PL. 2-1・2)** 調査区南側中央に位置し、検出面の標高は約8.0 mを測る。北側はSD012に切られている。掘方の平面プランは円形を呈し、直径約1.6 m、深さ約1.4 mを測る。底面付近で湧水した。上層の黒褐色土では弥生時代中期の土器片がまとめて出土した(PL. 2-1)。これらは井戸がある程度埋まった段階でまとめて廃棄されたものと考えられる。井戸の使用時期は弥生時代中期かましくはそれより以前と推定される。

**出土遺物 (Fig.12 PL. 4)** 弥生土器および石庖丁が出土した。5～7は壺である。いずれも肥厚した「L」字状口縁を有する。器面は磨滅しているが、5・7は内外面ともににぶい橙色、6は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。8は壺の口縁部で白色粒を多く含み、器面は灰白色を呈する。9・10は甕、11～13は壺の底部である。9・10は上げ底を呈し、9の外面にはハケメ、10の内面にはユビオサエがみられる。14は立岩産の石庖丁で半月形を呈する。全面に丁寧な研磨が認められる。

**S E 006 (Fig.13・14 PL. 2-3・3-1)** 調査区南西側に位置する古墳時代初頭の井戸である。検出面の標高は約7.9 mを測る。南西の上端は一部削平されていた。掘方の平面プランは長軸1.0 m × 短軸0.8 mの橢円形を呈し、深さ約1.1 mを測る。底面付近で湧水した。壁体は底面から0.4 m上まではほぼ垂直に立ち上がり、それより上部はやや広がる。上面南側ではテラス状の段が認められる。

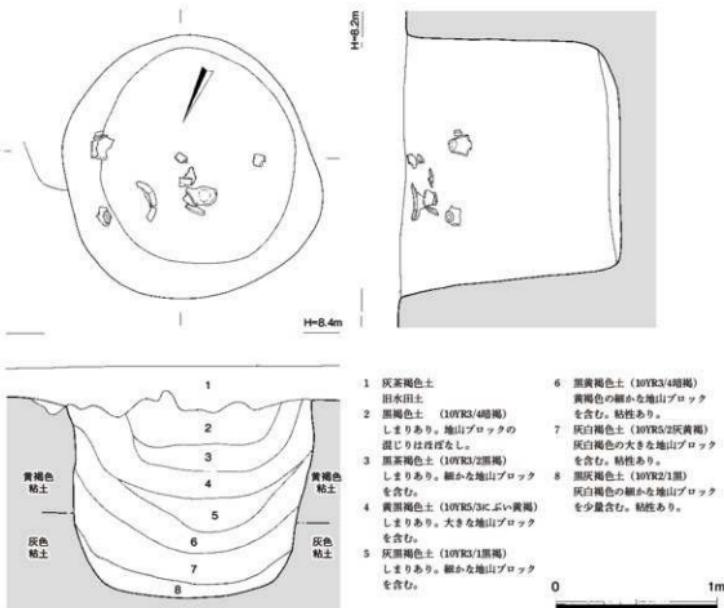


Fig.11 SE003実測図 (1/30)

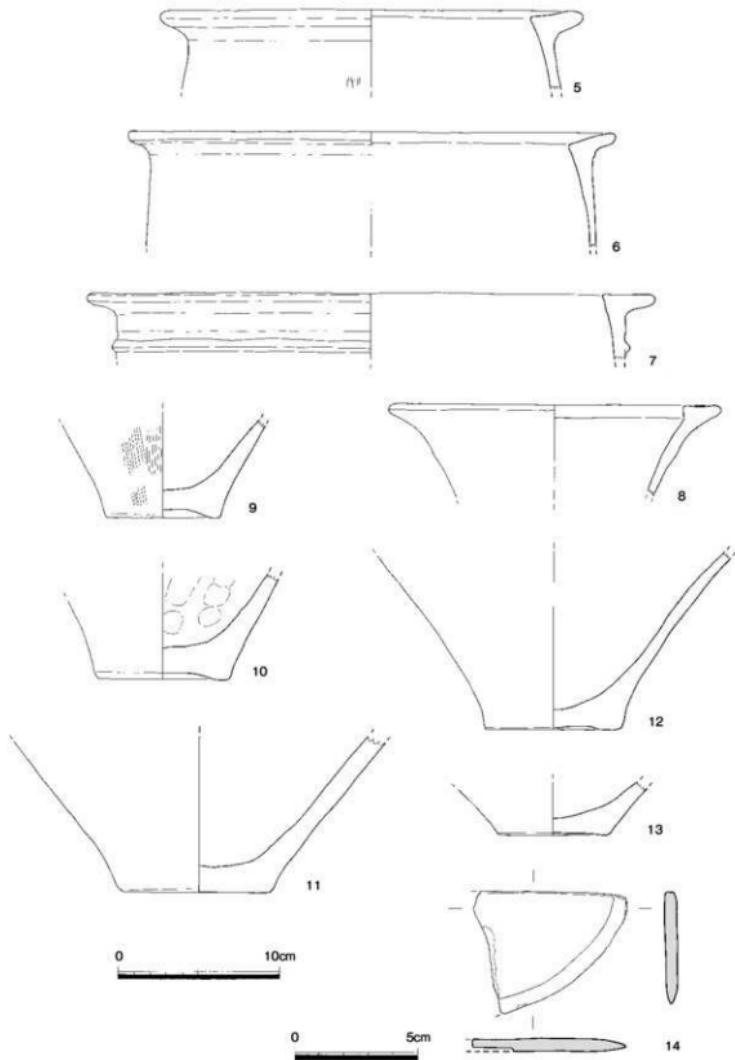


Fig.12 SE003出土遺物実測図 (1 / 3, 14のみ1 / 2)

出土遺物 (Fig.14 PL. 4) 土師器と磨石が出土した。15は小型丸底壺で、口縁部は長く、体部は扁球で鉢状を呈する。16・17は鉢である。ともに精良品で、器面の色調は16が褐色、17が灰白色を呈する。18・19は甕の口縁部である。18の器面にはぶい橙色、19は白色粒を多く含み、外面が灰褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。20は甕の胴部片である。外面にハケメ、内面にケズリがみられる。21は安山岩製の磨石である。残存長8.3cm、幅7.7cm、厚さ3.6cmを測る。欠損部以外は全面研磨されている。

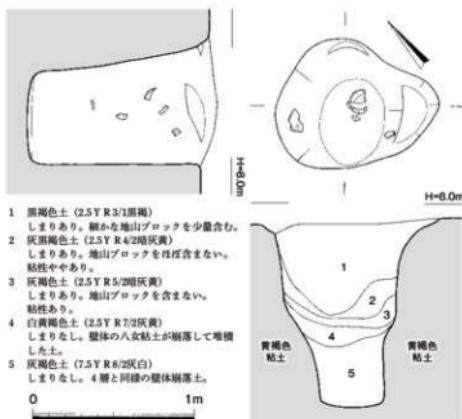


Fig.13 SE006実測図 (1 / 30)

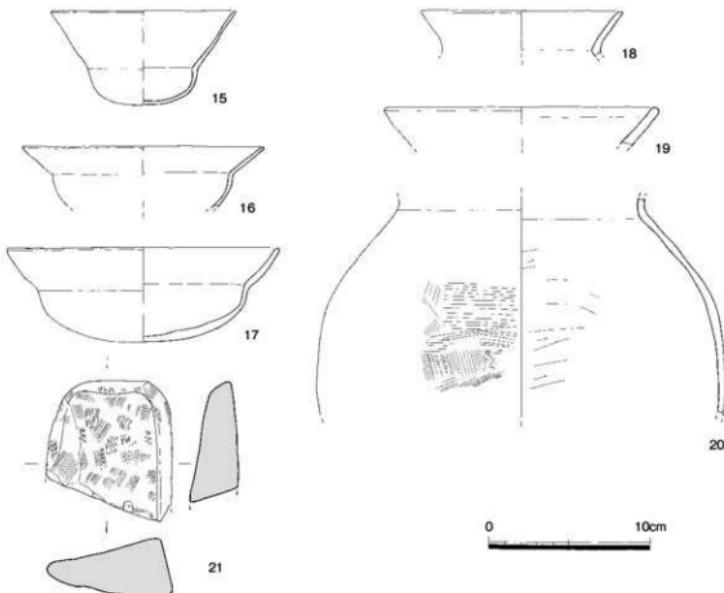
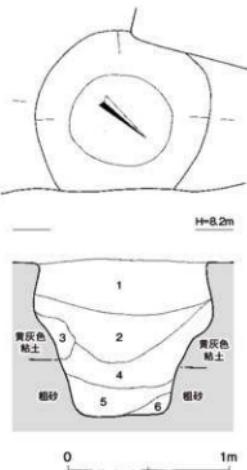


Fig.14 SE006出土遺物実測図 (1 / 3)

S E 032 (Fig.15・16 PL. 3-2) 調査区の南東側に位置し、検出面の標高は約 8.0 m を測る。西側の上端は擾乱によって削平され、北東側は S D 041 に切られる。掘方の平面プランは円形を呈し、直径約 1.1 m、深さ約 0.9 m を測る。底面は八女粘土層下の粗砂層まで達しており、標高約 7.3 m で溺水した。壁面は底面から約 0.6 m まではやや広がりながら立ち上がり、それより上部はやや内傾している。

調査区南東端では丘陵の落ちを確認しており、本調査地で検出された井戸の中では最も落ち際に近い。出土した土器の年代から弥生時代終末～古墳時代初頭の井戸と考えられる。

**出土遺物 (Fig.16)** 土師器の破片が多く出土した。22 は小型丸底壺である。白色粒を少量含み、外面は灰白色を呈する。23 は複合口縁壺である。白色粒を多く含み、外面は赤灰色を呈する。24 は直口壺である。口縁部外面にはハケメの痕跡がみられる。25 は鉢である。精良品であるが、器面は磨滅している。口縁部外面にヨコナデが認められる。内外面ともににぶい橙色を呈する。26 は脚付鉢の脚部である。外面ではわずかにハケメがみられ、脚部と鉢の接合面ではハケ後ナデが施されている。脚部内面にはハケメ、脚端部にはヨコナデがみられる。器面の色調は外面が灰白色、内面が暗灰色を呈する。27・28 は甕である。27 は細かな白色粒を多く含み、器面はにぶい黄褐色を呈する。調整は内面において口縁部から頸部までヨコナデ、肩部でヘラケズリが認められる。口縁部外面には煤が付着する。28 は白色粒を多く含み、器面の色調は浅黄橙色を呈する。頸部外面と口縁部内面にはハケメの痕跡が認められる。



- 1 黒褐色土 (7.5Y R 2/2黒褐色)  
しまりあり。
- 2 黄灰褐色土 (10Y R 2/1黄褐色)  
しまりあり。地山ブロックを含まない。粘性なし。
- 3 黄灰褐色土 (10Y R 7/3にぶい黄褐色)  
しまりなし。壁の八女粘土が削削して堆積した土。
- 4 黑褐色土 (10Y R 2/1黒褐色)  
地山ブロックを含まない。粘性あり。
- 5 黄灰褐色土 (10Y R 3/1黒褐色)  
粘性あり。
- 6 黄灰褐色土 (10Y R 7/3にぶい黄褐色)  
しまりなし。3層と同様の卵体崩落土。

Fig.15 SE032 Survey Plan (1/30)

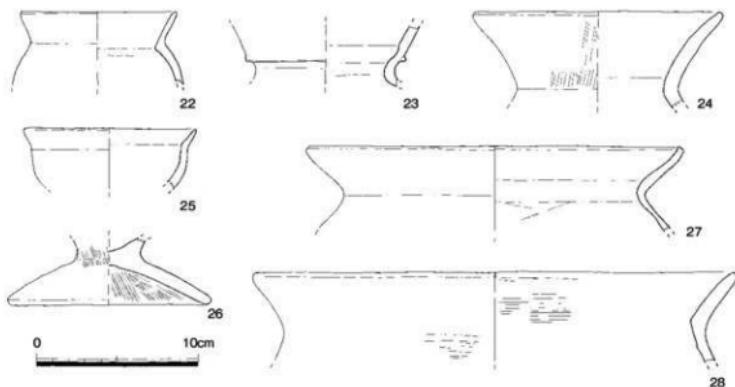
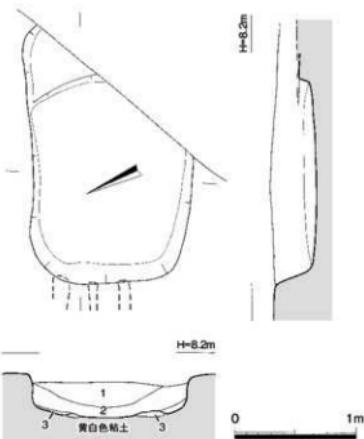


Fig.16 SE032 Excavated Objects Survey (1/30)

### (3) 土坑 (SK)

S K 033 (Fig.17・18 PL. 3-3) 調査区の南東側に位置し、検出面の標高は約 8.0 m を測る。東側は調査区外へと続き、西側の上端は一部擾乱によって削平されている。東西長 2.0 m 以上 × 南北長 1.3 m を測り、平面プランは隅丸長方形を呈すると推定される。深さは約 0.3 m を測る。底面は平坦で、東側にはテラス状の段が認められる。確認できる壁面はすべて上部に向かってやや広がりながら立ち上がっている。近隣の調査地で同様の平面プランを呈する貯蔵穴が見つかっており、貯蔵穴の可能性が考えられる。出土した土器の年代から弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。

**出土遺物 (Fig.18)** 弥生土器および土師器が出士した。29・30 は弥生土器の甕胴部片である。ともに胴部に突帯がつくが剥離している。器面も磨滅しており、調整は不明瞭である。29 では突帯の上下縁付近にハケメがみられる。器面の色調は 29 が灰白色、30 が明褐灰色を呈する。31 は土師器で複合口縁壺の頭部である。頭部外面にはヨコナデがみられる。器面の色調は外面が明褐灰色、内面が灰白色を呈する。



- 1 深黄褐色土 (10Y R 3/2暗褐色)  
しまりややあり、大きな地山ブロックを多く含む。
- 2 黒褐色土 (10Y R 3/1黒褐色)  
粘性あり。地山ブロックをほぼ含まない。
- 3 黄褐色土 (10Y R 4/2浅褐色)  
粘性あり。細かな地山ブロックを少量含む。

Fig.17 SK033実測図 (1 / 40)

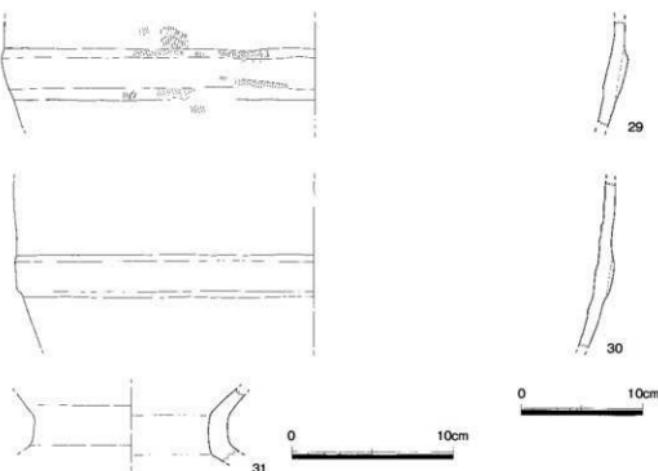


Fig.18 SK033出土遺物実測図 (29・30 = 1 / 4, 31 = 1 / 3)

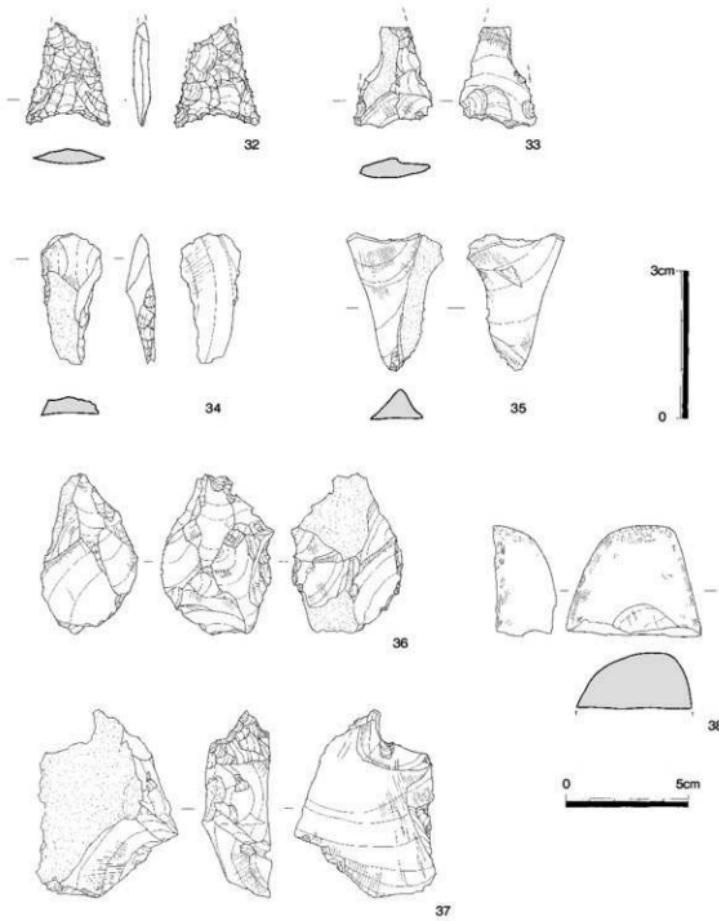


Fig.19 出土石器実測図 (1/1, 38のみ1/2)

#### (4) 出土石器 (Fig.19)

32はSD016で出土した打製石鎌である。凹基式で抉長0.2cmを測る。側縁には細かな剥離を施し、鋸歯状を呈する。黒曜石製である。33はSD005で出土した打製石鎌の未成品である。表面に原石面、裏面に主要剥離面を残す。縦長剥片を利用し、側縁に剥離を施す途中で先端及び左側縁が欠損したため、未成品のまま廃棄されたものと考えられる。黒曜石製である。34はSP028で出土した台形石器である。表面には原石面を残す。横長剥片を利用し右側縁には刃潰しを施す。黒曜石製である。35は遺

構検出時に出土した黒曜石の薄片である。表面には原石面を残す。縦長剥片を利用し、先端にわずかに使用痕が認められる。36・37は黒曜石の石核か。一部に原石面を残す。36はSP008、37はSD020で出土した。37は縦長剥片となる。38はSD021で出土した磨石である。先端部には叩きの痕跡が見られる。安山岩製である。

### III おわりに

五十川遺跡ではこれまでに21次の調査が行われたが、小規模な面積を対象とした調査が多く、各時期の遺構が散発的に点在している状況である。これまでの調査では、弥生時代前期後半～中期初頭および古墳時代前期、中世後半の時期に特に遺構が集中して検出され、この3時期に集落としてのピークがあるとされている。本調査地点では弥生時代中期の井戸1基、弥生時代終末～古墳時代初頭の井戸2基、弥生時代終末～古墳時代初頭の土坑1基、近世の大溝などが検出された。大溝以外の溝についてはその多くが遺物の出土量が非常に少ないため、時期が不明確なものが多いが、他の調査地点で確認されている弥生前期後半や中世後半にあたる遺構は本調査地で検出されておらず、その時期の遺物も出土していない。

調査地の南東隅ではわずかに丘陵の落ち際が確認されており、本調査地点は五十川遺跡の立地する丘陵の北東端付近に位置すると推定される。検出された遺構の時期を検討した結果、弥生時代中期や古墳時代初頭に位置づけられる遺構は調査地の南側に立地しており、調査区の北側では古代以降に位置づけられる遺構が確認された。このことから丘陵の先端北側に遺跡が展開するのは古代に入ってからと考えられる。以下では本調査地における遺構の時期的変遷を簡単にまとめめる。

本調査地で最も古い時代の遺構は弥生時代中期にあたる井戸である（SE003）。本調査地の南側に位置する第2次調査では弥生時代前期末にあたる住居跡が検出されているが、本調査地では弥生時代前期末にあたる遺構は確認できなかった。住居跡や建物跡を検出できていないが、弥生時代中期の井戸が検出されていることから、当該期に丘陵の北側、先端付近において集落が営まれていた可能性が考えられる。なお、他の調査地点と同様に、打製石鎌や石核などの石器類が調査地内で出土しているため、弥生時代中期より以前に遺跡が展開する可能性がある。

弥生時代終末～古墳時代初頭の井戸2基（SE006・SE032）と土坑1基（SK033）が検出されているため、弥生時代終末～古墳時代初頭の段階においても本調査地点で集落が営まれていた可能性が想定される。弥生時代中期と弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構が調査地の南側で検出されていることから、今回調査していない南側の未調査地にその時期の遺構が展開している可能性が考えられる。弥生時代終末～古墳時代初頭以降、古代と推定される溝がわずかに検出されたものの遺構は希薄である。中世に関しては遺物も確認されておらず、古代から中世にかけては集落が営まれた痕跡は認められない。近世にはいると、調査地の東西を縦断する大溝（SD020）がつくられる。SD020における遺物の出土状況と年代から、近世に掘削され、明治期に入って完全に埋没したと考えられる。Fig. 3に示した古地図は大正末～昭和初期のものであるが、本調査地は水田として利用されていることがわかる。SD020の上に旧水田土が堆積し、水田にともなう暗渠に切られていることから、明治以降に水田として利用されるようになったとみられる。



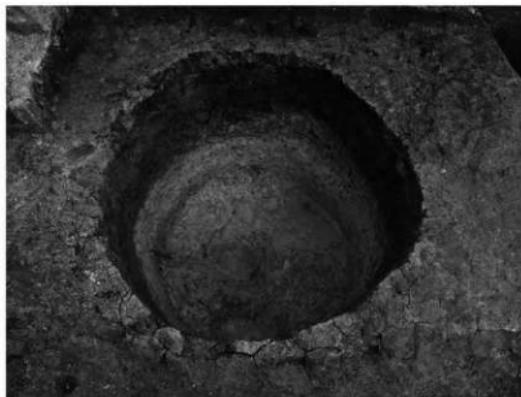
1 I区全景写真（東から）



2 II区全景写真（東から）



1 SE003 土器出土状況  
(北西から)



2 SE003 完撮状況  
(北西から)



3 SE006 半裁状況  
(南西から)



1 SE006 完掘状況（南から）



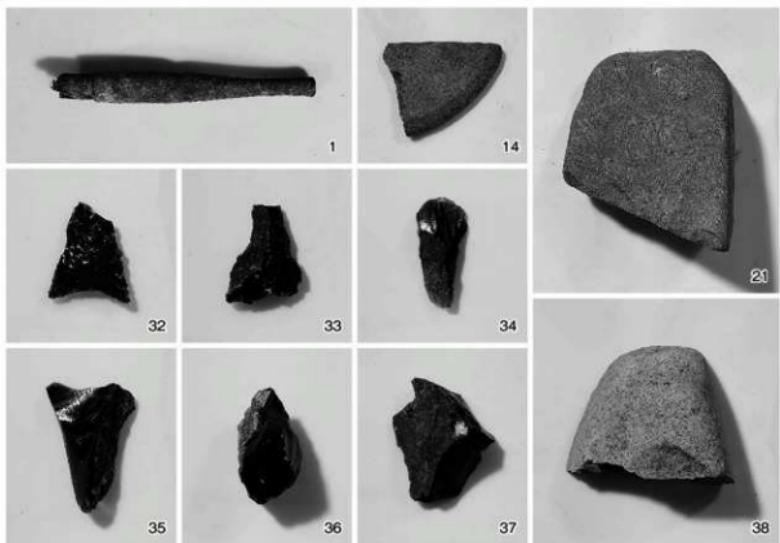
2 SE032 完掘状況（東から）



3 SK033 完掘状況（北西から）



1 調査区西壁土層（東から）



2 出土遺物

## 報告書抄録

|                   |  |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
|-------------------|--|-------------------------|-------------------------|------------------------------|--------------------|---------------------------|-------------------|
| ふりがな              | ごじっかわいせき 8   |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| 書名                | 五十川遺跡 8  |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| 副書名               | —五十川遺跡第20次調査の報告—   |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| シリーズ名             | 福岡市埋蔵文化財調査報告書  |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| シリーズ番号            | 第1330集   |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| 編著者名              | 松崎友理   |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| 編集機関              | 福岡市教育委員会   |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| 所在地               | 〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667  |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| 発行年月日             | 2018年3月26日   |                         |                         |                              |                    |                           |                   |
| ふりがな<br>所収遺跡名     | ふりがな<br>所在地  | コード                     | 北緯                      | 東経                           | 発掘期間               | 発掘面積<br>m <sup>2</sup>    | 発掘原因              |
| ごじっかわいせき<br>五十川遺跡 | ふくおかけんふくおかしきはたく<br>福岡県福岡市博多区<br>もろおか 3 ちょうめ 647ばん 1<br>諸岡 3 丁目 647番 1  | 市町村<br>40132            | 遺跡番号<br>0088            | 33°<br>33°<br>44°            | 130°<br>26°<br>26° | 20160627<br>~<br>20160824 | 247<br>記録保存<br>調査 |
| 所収遺跡名             | 種別   | 主な時代                    | 主な遺構                    | 主な遺物                         | 特記事項               |                           |                   |
| 五十川遺跡<br>第20次調査   | 集落   | 弥生時代中期<br>弥生時代終末～古墳時代初頭 | 溝 12条<br>井戸 3基<br>土坑 1基 | 弥生土器、土師器、<br>打製石器、キセル、<br>下駄 |                    |                           |                   |
| 要約                | <p>第20次調査は五十川遺跡の北東端に位置する。調査区を東西で二分割し、西側をI区、東側をII区と設定した。遺構は標高約8mの八女粘土層上面で検出され、II区南東隅では丘陵の落ち際を確認した。主な遺構は溝、井戸、土坑などである。調査地の中央に位置する溝は幅2.4m、深さ約0.6mを測る。瓦や下駄、キセルなどが出土し、近世の溝と推定される。井戸は弥生時代中期のものが1基、弥生時代終末～古墳時代初頭のものが2基の計3基を検出した。弥生時代終末～古墳時代初頭の土坑を1基検出し、隅丸長方形の平面プランと推定される。近隣の調査地で同様のプランを呈する貯蔵穴が見つかっており、貯蔵穴の可能性が考えられる。</p> |                         |                         |                              |                    |                           |                   |

### 五十川遺跡 8

—五十川遺跡第20次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1330集

2018年3月26日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
印刷 協文社印刷株式会社  
福岡市西区小戸4丁目24-5

